

---

# 雨上がり。

星桜なつき。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨上がり。

### 【Zマーク】

Z5216F

### 【作者名】

星桜なつき。

### 【あらすじ】

雨降りの日に出かけた私。通りかかった公園で……。

朝から降り続いている雨は、私の期待などおまこなしじに降り続  
いていた。

「……晴れてくれればよかつたの？」

しどしどとこづ音がなぜか寂しさを連れてくる。  
でも、どうしてだろう。そう感じたりするのって。  
雨は生き物にとって命の恵みを与えてくれてこむところの元。  
曇つていて、薄暗いから?  
世界が重苦しく感じてしまうから?

「うそ。今日はいい日」

ネガティブなこと考えちゃ、ダメだよね。  
今日はそんな事を考えることなんてない。  
私は自分にそう言いきかせて、お気に入りの赤い傘を差して、雨  
の中を歩いていた。

ふと、こつもの公園の前を通りすがりとしたとき、小さな赤い  
傘が公園の中にあるのに気がついた。

「女の子、かな？」

公園に女の子がいるのは不思議な事ではないけれど、雨の中、ぽ  
つんと一人で佇んでいたので、気になつた。  
その小さな傘に近づいて話し掛けたみた。

「「ひんてむひまつ」

黄色いスマックを着て、傘と同じ赤色の長靴を履いた女の子。声をかけた私を一瞥したけど、またそのまま俯いてしまった。変な人だと思われたかな。

「ね、どうしたの？ 一人？」

「……」

そつか、立つたままだった。

私はしゃがんで、女の子の田線とあわせた。

「今日は雨が降っているね」

「……」

「遊べなくてつまんないね」

「……」

「でもね、雨って、植物さん達の「ひまんになるんだよ」

「……」

優しく話しあげてみたけど、女の子は俯いたまま答えてくれなかつた。

「ねえ、雨、嫌い？」

「おねえちゃん……」

やつと答えてくれた。

「うん」

「わたし、あめ、きらい」

すねたように口を尖らせた。

「そう……」

「どうしちゃ、あめ、ふらなきやこけないの？」

「今日？」

「おでんきだつたら、おとうさんとあわびこけたの」「元

「そつか。それは、つらかったね」

そうだ。雨の日が憂鬱に感じるのさ、私も昔……雨の日で行きたかった所にいけなかつたところ、自分で忘れてしまつていた記憶

の破片が、そう感じさせているのかもしれない。

「でも、またいつか、行けるよ」

「……。きょうがよかつたの」

「どうして?」

「あのね、きょうね、わたしのたんじょうびだつたの。だからおと  
うさん、ゆうえんちにつれていつてくれるつて」

半分なきべそをかいたような顔。

「きょう、誕生日なの?」

「……。うん」

「よかつた。あのね、じつは、お姉さんも今日が誕生日なの」

「おねえさんも?」

「うん。今日、私が生まれた日。一緒だよ」

「ほんと?」

「ええ。今日は、私の誕生日なの」

「しのむ、きょう、たんじょうびー」

「うん、しのちゃん、誕生日おめでとう」

「ありがと、おねえちゃん」

張り合ひよっこ、可愛らしくなついてきてくれた。

「雨が降って、遊園地いけなかつたけど、いい事があつたよね」

「うん」

やつと笑顔になつてくれた。

「志乃ー」

遠くで呼ぶ声がした。

「あ、おとーさんだー」

「うん」

「おとーさんーん」

たとたとと父親らしい男の人에게てゆく。とてもやさしことを  
した人だった。

「志乃、今日は遊園地いけなかつたけど、家でみんなでパーティー  
だぞ」

「ぱーていー？」

「うん、望くん達みんなが来ているぞ」

「ほんとー？」

「ああ。そ、こいつか」

「うんっ」

そして、私のほうに向く。

「おねーちゃん、またねー」

「うん、ばいばい」

私を真似するように可愛く手を振っていた。

父親らしい人も会釈をして一人、雨の中去つていった。

私はふたたび、雨の中を歩き始めた。

誕生日。自分が生まれた日。

そんな日に、新しい出会いができた。  
きっとまた、この公園での女の子と話ができる。

「うん、今日はいい日」

でも、私も、誕生日に祝ってくれる人がいてくれたら、私、その  
人を好きになつてしまふかも。  
……なんてね。

空を見あげた。

雲の間から太陽の日差しが差し掛かってきた。

「傘は、もういらないかな」

雨上がり。

全てのものが、輝いて見えた。

(後書き)

ちょっと気分転換に短編を書いてみました。文学じゃないかも？誕生日の出来事。皆様はどんな思い出がありますか？ほんわかしていただけたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5216f/>

---

雨上がり。

2010年10月22日00時54分発行